

## 35年をかえりみて

松本忠司

小樽商科大学の講師に採用されて、私が小樽に着任したのは、ちょうど35年前、1957年4月20日頃であった。当時の交通事情では、東京から小樽への行路は、列車と連絡船を乗り継ぐという形しかなかったが、私が乗った列車が通るはずだった函館本線の稲穂トンネル内で雪どけ水のために地崩れがあったとかで、急遽、列車は室蘭まわりとなった。昼頃には小樽到着の予定がかなり遅れそうということだが、急ぐ旅でもないことだと、車窓の外の、初めて見る北海道の早春風景を私はのんびり楽しんでいたものだ。ところが、駅に着いてみて、当時の学生部長だった石河英夫教授と、講師として、ひと足さきに着任していた久野光朗さん（現教授）が出迎えに見えていたのには驚いた。聞けば、お二人は昼頃、駅に来てトンネル内の事故を知り、確実な到着時間がはっきりしないため、駅前の喫茶店で待つこととし、5時間ほどのあいだ、駅の窓口と喫茶店とを幾度も往復したという。列車の遅延は私のせいではないにせよ、出迎えなどということがまったく念頭になかっただけに、私はすこぶる恐縮したものである。

小樽での私の生活第一歩は、石河・久野両先生に心ならずも多大の迷惑をおかけすることで始められたが、考えてみると、この35年という歲月、私は先輩・同僚の諸先生や、事務職員の皆さんには、公私ともに、随分と迷惑のかけどおしであったように思う。そうした事実をいちいち数えあげ、自責・自戒の言葉を書き綴るとすれば、一巻の「懺悔録」をもってしてもなお足りないだろう。

しかし、小樽商科大学は寛大である。ただ定年まで勤めさせてもらっただけで、大学に対してさしたる貢献もなかった私に、その名には値しない名誉

教授の称号を与えられたうえ、「人文研究」の記念号を出してくださるといふ。私の感謝の気持ちをどう言い表したらいいのか、適切な言葉が見つからず、もどかしいかぎりだ。ところで、その記念号といえば、感謝の気持ちに嘘いつわりはないのだが、今の私にとっては頭痛の種でもある。恒例となっている当事者の一文なるものを書きあぐねているからだ。緑丘の教室に非常勤講師として顔を出しているのだから、私にはまだこの大学との「お別れ」の実感が湧いてこないということもある。だが、何にもまして私の怠慢と、計画性のなさに尽きるだろう。これまでも「人文研究」の刊行遅延の常習的な元凶の一人は、ほかならぬ私であったのだから。ここでもまたまた反省を余儀なくされる。「反省だけならサルでも出来る」というテレビ・コマーシャルを思い出す。私は深く肝に銘ずべきである。

私がロシア文学をまなぶようになった経緯については、ほかの場所で、一度ならず書いたことがあるので重複は避けたいのだが、そうすると、また振りだしに戻ってしまいそうだ。あえてそこから話を始めさせていただこう。

戦後まもないころ、私は十代の最後の時期を秋田県北部の山林のなかで過ごしていた。電気もなく新聞もない山奥の飯場ぐらし。この時期にたまたま手にしたゴーリキイの『どん底』は、それまでに通俗小説の乱読によって作られていた私の文学観を根底からくつがえすものであった。粗野な生活にすさんだ魂を、私には無縁なのだが魅惑的な生活の夢でやわらげ、目の前にある生活への不満をつかの間だけでも忘れさせてくれるはずの文学が、ここでは反対に、いやでも自分の生活を見つめさせずにおかないものになった。夜の宿にたむろする人びと、それぞれに曳きずる不幸な過去、そこにかもし出される野卑と喧騒……それらは、私の周辺の生活に怖ろしいほど似かよっていた。それでいて、希望のかけらもないと思われるこの世界から、「人間が真実だ！ 人間は自由だ！ 人間は尊敬しなきゃならねえ！」という、力づよい、誇らかな人間讃歌がほとぼしり出る。驚嘆の思いで私もこの言葉をとなえてみた。しかし、苦い疑問が残った、——すばらしい存在であるはずの人間

と、現にあるがままの人間とが、なぜこんなにも違っているのか……もちろん、当時の私の理解力では、この作品のもつ深い意義を十分に把握することはできなかつただろう。だが、登場人物の一人で、泥棒稼業からの脱出をねがう若者の、「自分で自分を尊敬できるような生活をしたい」という切実な欲求に強い共鳴を抱かずにいられなかつたことは事実だ。

それからまもなく私は東京に出た。しばらくは各種の日雇い仕事にすごしたが、ある日、たまたま古本屋の棚に、同じゴーリキイの『私の大学』を見つけた。人間について、生活についてまじめに考える必要のあることを、この本は私に初めて教えてくれた。人間になるための、私のほんとうの青春第一歩はこの本との出逢いから始まった、と言っていい。ゴーリキイ自伝小説3部作の最後を飾る『私の大学』は、わずか3歳4カ月で父と死別、11歳のとき母も死んで孤児となり、下積みの労働で自活しなければならなかつた作者の、16歳から20歳までの生活を描くもので、この小説は主人公アレクセイ・ペーシコフ（ゴーリキイの本名）が、大学での勉学に希望を託し、故郷を去ってカザンにおもむくところから始まる。「大学で勉強するという幸福のためには拷問さえ辞しはしない」という熱心な向学心にもかかわらず、そこで彼を待っていたのは大学のかわりに、以前にもまさる貧困、重労働、精神的苦痛の連続であった。しかし、幼いうちから彼を厳しく鍛えてきた生活は、「人間をつくるのは環境にたいする抵抗である」という考えを彼に植えつけていた。彼は、自分の前に冷たく閉ざされた大学の門の内側にではなく、その外側に、人間とその生活のある到るところ——波止場や地下のパン焼き所の労働の場に、酒場や貧民窟のなかに、「私の大学」を発見していく。この小説の原題名が単数の大学（ユニヴェルシチェート）でなくて複数の大学（マイー・ユニヴェルシチェートウイ）であるのはこの意味による。

19歳の冬には自殺をさえ決意しなければならなかつた、帝政ロシアの下層民衆の悲惨な生活のなかで、若き日のゴーリキイが、いかに多くの悲哀と苦悩に打ち克っていったことか、いかに多くのことを人びとの中で学びとったことか、そして一人の人間の魂の成長に、いかに多くの人が深くかかわって

いることか……そのとき私も19歳であった。ゴーストの青春に強烈な感銘を受けると同時に、自分の生きざまをかえりみて私は恥じずにいられなかった。私は生活の不如意から、心のうちに怨恨のみがはびこるままに、犯罪的行為にさえ麻痺しかねない心境にあったのだ。

やがて定職につくことができ、収入も貧しいながら安定し、余暇にも恵まれるようになるにつれ、文学を本格的に学びたいと思うようになって、大学受験資格を得るために夜学に通いはじめた。こうして朝鮮戦争がやがて始まる年、私は早稲田大学の夜間部の学生となって、昼と夜とが極端に対立する二重の生活を生きることになった。昼は電工として占領軍接收住宅の営繕に働き、夜は学生たちの輪のなかで文学・語学・社会科学をまなび、戦争反対、「赤色」教授を大学から追放せよと迫る「イールズ声明」反対のスクラムに身をおいた。しかし、ほかでもない占領軍機構の末端に連なる私自身の立場と役割は、しばしば、私を鬱屈した思いに駆りたてるのであった。いまでも胸に鋭い痛みをもって思い出す——死傷者の出た「血のメーデー」のとき、私は朝鮮爆撃の最高指揮官であった米空軍少将の住宅の天井裏で仕事をしていて、下から聞こえるラジオ・ニュースで事件を知ったのであった……。

二重生活のはざままで、さまざまな迷いと悩みに苛まれるとき、私は自分でも知らないうちに『私の大学』に向かい合っていた。そしてこの本を読むつど、自分のささやかな「経験」や「苦悩」を過大視することの愚を教えられ、自己教育の当面の課題に立ち向かう気力を奮いたたせられたのである。

それにしても、早稲田で、しかも夜間の第二文学部で学ぶことができたということは、私にとってこの上なく幸せなことであった。昼の労働のあと、それぞれの職場から大学の古ぼけた教室に駆けつけ、授業が終わると大学から高田馬場駅まで夜の道を、先生を囲んで十数人が一団となって行き、語り、ロシア民謡を合唱し、ときには途中の汁粉屋か居酒屋に繰りこむ。その楽しみだけのためにも、疲れた体に鞭打ってでも、大学に足を向けずにはいられなかった。そして、すばらしい先生方が揃っておられた。露文科が戦争

中に廃科の憂き目に遭い、戦後になって復活したということもあって、何年ぶりかで教壇に戻られた先生方は、すこしでも長く学生たちとともに時をすごすのを喜んでおられるように見えた。新制大学施行によって生まれた夜間部には、特にそのような雰囲気があったように思われる。私たちにロシア語の最初の手ほどきをしてくださったのは、丸山政男先生、横田瑞穂先生、野崎韶夫先生で、入学当初の良き思い出の多くはこの三人の先生に結びつく。そして終生の恩師、黒田辰男先生。教室で黒田先生の指導を受けたのは上級の学年になってからだが、私が同人誌に下手な小説や戯曲を発表したことが機縁となって、かなり早いうちから、指導・助言をいただく関係が成立し、その後ながく、学問上、生活上、多面にわたって先生から格別の薫陶を受けて今日に至っている。そして大学上級から大学院修士課程にかけての米川正夫先生。私は黒田ゼミに所属していたので、教室よりはむしろご家庭で、米川先生ご夫妻から多くの点で啓発され、これも私の心の貴重な財産の一つとなっている。

学部3年の終わりに近い頃、私は電工の仕事をやめることにした。講和条約締結後、私の職場では経費削減のための人員整理が繰り返されていた。私には指名がなかったが、頼みこんで整理の対象に入れてもらった。大学最後の一年はふつうの学生として、図書館を利用したり昼間部の講義にも出てみたいという強い希望があったのだ。当面、退職金と失業保険でなんとかなる、という目算もあった。しかし、私の退職を知ったある先生が、きわめておぼつかない語学力の私に翻訳の仕事を紹介してくださった。半年かけての仕事で、月々の報酬も悪くない。「盲蛇におじず」の例えのとおり、ありがたく引き受けた。結局、この仕事が学部卒業論文の土台となり、また退職金がそっくり手つかずで残ったので大学院進学を決意した。なんとしても、ゴースト文学に本格的に取り組んでみたかったのである。

大学院に進んでからは、謝礼金目当ての翻訳仕事ばかりでなく、自分の名前で発表できた仕事も、私のもとに少しずつだが舞いこんでくるようになった。この時期にはまた、『私の大学』の訳者である蔵原惟人氏、高名な作家・

演出家で新協劇団の指導者の村山知義氏，画家の岡本唐貴氏，ゴーリキイ研究の大先達，山村房次氏，『おりん口伝』の作家，松田解子さん，そのほか多くの，芸術各分野の第一線で活躍中の方々に知遇を得る機会に私は恵まれた。もちろん，黒田先生はじめ早稲田の諸先生の推輓あってのことである。ここに名を挙げた方々は，それぞれに貴重な思い出を私の胸に遺してくれたのだが，早稲田の諸先生を含めて，その多くの方々はすでに世を去られた。万感胸に去来する。

ゴーリキイの文学作品を翻訳する機会は，意外に早く訪れた。それも演劇という形での発表である。1955年12月，戯曲『敵』（新協劇団公演，村山知義演出，飛行館劇場），1956年6月，戯曲『どん底』（新演公演，下村正夫演出，俳優座劇場），どちらも各新聞の劇評で取り上げられ，予定された公演が終わって旬日を経ずに再演という，当時では稀な成功を博した。つづいて，1957年1月，これもゴーリキイの戯曲で本邦初訳の『ソーモフとその他の人びと』を演劇誌『テアトロ』に発表することもできた。私はすっかり演劇の世界にのめりこんでいた。芝居の稽古が始まると，どちらの場合にも，対称的な村山演出と下村演出の双方の真髓を盗み取ろうとの不遜な願望を秘めて，稽古場に日参した。たしかに，戯曲の翻訳には文学的であるばかりでなく，演劇的に取り組むことが必要ではある。そして翻訳者は，本質において，原作者に劣らぬ劇作家であるうえに，すぐれた演出者，俳優，観客でなくてはならないだろう。

しかし演劇への熱中は，大学院での学業に影響なしには済まなかった。論文執筆に集中できる状態になく，課程修了を一年先へ延ばさざるを得なかった。だが，実をいえば，修士課程のことはどうでもいい，というのが偽らざる本音のところであった。そうした私を研究の本道に立ち帰らせるために，黒田先生はじめ早稲田の先生方がどれほど心を痛めておられたことだろう。小樽商科大学からロシア語講師推薦の依頼を受けたとき，ほかの，私よりはるかに有能な候補者に代えて，私を推薦してくださったのは，水に落ちた哀れな小羊をすくい上げてやりたいとのご配慮だったろうか。だが，そのこと

が小樽商科大学にとって良かったかどうか、それは私の判断するところではない。

さて、小樽赴任後の研究業績なるものについて何か語らなくてはならないのだろうが、業績表を見て、私はいささか困惑を覚えずにいられない。私はロシア語の教師であったのだ。しかるに、ロシア語に関する論文は一点もない、これはどういうことか。語るべき言葉もない。ここは、私がゴーリキイという一人の作家に惚れこんだ人間であって、ほかには目が向かないのだ、と居直るほかはあるまい。だが、そのゴーリキイについても、私が曲がりなりにも書くことができたものは実に少ない。40年以上もこの作家に向かい合ってきて、彼から投げかけられた謎は数かぎりなくあるのだが、その多くが未解決のままに残されている。どうしても生命のあるかぎり、思考力がいささかでも残されているかぎり、私はこの作家のあとを追いかけていかなければならない。それにしても、ゴーリキイは厳しい。文学を人間の社会生活のいとなみの一環と把える彼は、人間にかかわるすべての問題を——政治、科学、産業、宗教すべての問題を人間のための文学の課題にすべきだと主張し、自らの実践によってそうした文学の範例を作りだしていった。ゴーリキイとその文学の研究者としても、こうした彼の文学姿勢を学ぶところから始めなければならない。だから研究とは直接的にはかかわらないし、むしろ研究活動を阻害するように思われることであっても、それが人間の運命に重要にかかわる問題であるかぎり、その問題に目をふさぐことも、そこから逃避することも許されない。一人の文学者にこだわりつづける人生が幸福か否か、人それぞれに考えもあろう。しかし私は、こだわることで幸せだったと思う。今後ともいっそうこだわりつづけ、出来ることなら、もっと良い仕事をする事で、もっと大きな幸せを得たいものである。

小樽商科大学の教員としての生活、先輩・同僚諸氏や学生たち、小樽の町の人々との交友など、それぞれに楽しくも懐かしい思い出が昨日のことのよう蘇ってくる。そのすべてを語ることはできない、そのなかの一つ二つを

選ぶことはもっとむずかしい。

時間に追われながら、だらだらと駄文を連ねたが、このあたりでヒョイト筆を擱く。

小樽商科大学のますますの発展を祈念しつつ、「人文研究」関係の諸先生、とりわけて編集委員、本号執筆の諸先生に心からお礼を申します。

追記。この一文を提出してまもなく、恩師黒田辰男先生の訃報に接した。90歳という御高齢ではあるが、心の中に寒風吹きつける思いを如何ともしがたい。